

韓國佛教學 SEMINAR

第一號

- 新羅華嚴の思想史的意義……………鎌田茂雄…(1)
- 『大乘六情懺悔』の基礎的研究……………木村清孝…(15)
- 韓國僧伽の鉢盂供養作法について……………梁銀容…(43)
- 煩惱所知二障と人法二無我の研究序説……………李平來…(67)
- 光宗の佛教政策と均如の華嚴思想……………李杏九(道業)…(81)
- 佛身論思想の展開—大乘莊嚴經論を中心に—……………全宗釋…(94)

1985. 12

第二號

- 『宣和奉使高麗圖經』の『圖解』の再現について……………中吉功…(1)
- 韓國佛教傳統講院の履歷制度研究……………蔡印幻…(6)
- 新羅の華嚴教學への一視点
- 一元晧・法藏融合形態をめぐって……………吉津宜英…(37)
- 華嚴經・十回向品の考察……………陳永裕(本覺)…(50)
- 初期佛教 Gahapati の宗教觀念
- Suttanipāta を中心とした文化試論—……………金漢益(悟震)…(1)

1986. 12

第三號

- 文武王と佛教……………田村圓澄…(1)
- 高麗清規としての誠初心学人文……………佐藤達玄…(19)
- 華嚴教判論……………張愛順(戒環)…(35)
- 現代巫俗の比較研究……………柳春姫…(53)
- 侍者 ĀNANDA ………………崔庚滿(淨印)…(27)
- Karma and Economic progress……………A. SUMANASARA…(1)
- 會員名簿および研究会報

1987. 12

諸思想の対立と宥和

現実の社会において異なった思想が対立している場合に、それらの存在意識を何らかの視点から評価し宥和しようとすることは、韓国人のあいだにおける一つの伝統的思惟方法であろう。常にそうであったとは言えないが、或る面では具現されている。

この傾向は古い時代の仏教者にまでたどることができる。^①

元晧の著した『二障義』は、華嚴宗とか唯識法相宗とかいうような宗派的意識を離れて書いている。

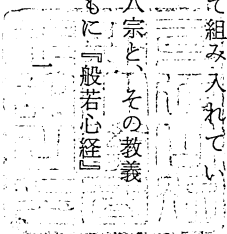
円測は、後世には一般に異端者と見なされているが、それは後代の既成学派としての法相宗がそのように決めつけたのであり、かれの著書には、あらゆる異説を網羅し引用している。^②

新羅の花郎道は、伝統的な気風をもとにして、仏教・儒教・道教の要素をそれぞれ適当に採用して組み入れている。

韓国仏教にも諸宗派の区別はある。曹溪宗が最大の宗派であるが、小宗派まで合わせると普通一八宗と、その教義を異にする円仏教を含めて一九宗が数えられている。しかしそれらの間の差は僅少である。僧俗ともに『般若心経』

諸思想の対立と宥和

中 村 元
(東方学院院长・東京大学名誉教授)



などを誦えるが、特に『千手経』は、みなが暗誦している。『千手経』は、大藏経のうちにおさめられておらず、朝鮮で編纂されたものであるらしい。

現在の仏教の実情を見ると、韓国で拜まれている仏は、一定していない。例えば、曹溪宗の或る寺院の本堂は「寿光殿」と称するが、中には阿弥陀仏が安置されている。ソウルには祇園精舎という名の尼寺があるが、そこには「南無阿弥陀仏」とも書かれているが、また「南無引路王菩薩」とも掲げられている。後者はシルク・ロード以来、拜まれている菩薩である。慶州の石窟庵では、石窟の中央に有名な温和な相好の釈迦本尊仏が坐し、背後には十一面観音が彫り出され、両側面には十大弟子の像がある。

百済の古都遺址にある定林寺の石仏坐像は、極めて破損がいちじるしいが、毘盧舎那 (Varrocana) 仏を表現していると解せられている。八角の台座の上に坐して、説法のすがたであったという。のちにその上に屋根がつくられたが、その銘文から見ると、屋根は一〇二五年前のものである。講堂の本尊であって高麗様式 (Koryo style) を示している。

こういうふうに、種々の仏菩薩が拜まれているのである。

また、現在の韓国の仏教では、特に読まれている唯一の終典なるものは存在しない。一般に読まれている仏典は、雑多である。

お経をカセットにおさめるということは、韓国でも行われているが、それらに収められるほどよく読まれている経典は、『阿弥陀経』『般若心経』『普門品』『観音経』、『千手心経』『怡山慧然禪師発願文』『懶翁禪師発願文』『華嚴略讚偈』『法性偈』(義湘大師の著)、無常偈などで、なお『普賢行願讚』などがよくよまれている。

朝鮮に儒学はすでに八世紀に導き入れられたが、それは有力ではなかった。十三世紀になって儒学(特に宋学)の影響が支配的になるが、それはシナ本土で宋学が盛んになったのに対応している。

李朝以来、儒教が支配的であったといっても、シナ民族の儒教と同一ではなかった。すでに高麗王朝の時代に支配的であった現実的な仏教が思わぬところに潜んでいる。

近代仏教の指導者であった西山大師(休静、一五二〇〜一六〇四)は『禅教积』『禅教訣』『清虚堂集』『三家亀鑑』すなわち、『禅家亀鑑』『儒家亀鑑』『道家亀鑑』を著わして、儒仏道三教が形においては分れているが、一心を明らかにするという点では異なっていない、と主張して、後世の李朝仏教徒の三教合一論の源を開いた。⁽⁴⁾

また、その一生は変幻奇抜であり、その行動は端睨すべからざるものがあったという点で、梅月堂、金時習⁽⁵⁾、雪岑(一四三五〜一四九三)は、日本の一休和尚を思わせるものがあり、後代の韓国人に情動的に与えられた影響は大きい。かれは禅の立場から『法華経』を理解して『蓮華経別讚』を著わし、また天台宗は禅に属するものであると断言している。またかれは『華嚴釈題』をも著している。のみならず、かれは、仏教と儒教とは相もとらないものであると考えた。その理由としていわく、——仏の本意は、『慈悲を先となす。』だから道德の圈内に降りて来れば、儒教と矛盾しない。不殺不盗などの諸戒は、儒教の説く仁義と同じ趣意である、と。⁽⁶⁾

韓国では、殊に李朝のときに儒教を大がかりに取り入れた。その影響は、日本におけるよりもはるかに強い。日本では、江戸時代以来、東京に湯島聖堂があるが、韓国では「聖堂」と称することは無い。それに相当するものは「成均館」である。その理念は、「均」すなわち「和」「調和」を重んずるのである。その「調和」なるものは、主体性に留意し、同時に変化を重んじて、一つものに固執しないことを意味する。

朝鮮的特徴を示した儒教者も同様であった。

鄭寅普は、学問の正統・異端という問題を離れ、実学を宣揚しようとした。これらの人たちの学問を跡づけることで朝鮮国学の発達を述べようとした。これは、朝鮮王朝の朱子学至上主義の桎梏のもとでの学問的反省の表れともいえる。徐敬徳(一四八九〜一五四六)、李珥(李栗谷 一五三六〜一五八四)に始まる主気派系統の流れに連なる立場

であった。この陽明学的学問の流れは朱子学と二律背反する思想体系ではない。時代の内外の矛盾を克服するために二つの学問体系を統一したものとして理解すべきである。したがって、洪大容も全面的に陽明の思想に影響されたというよりは、むしろ、自己を克服し、時代の問題をつきつめていくうちに、彼は陽明学に出会ったというべきであると評されている。⁽⁷⁾

洪大容は、外国人を野蛮人扱いするのをやめ、思想上の寛容を国際的關係にも適用しようとした。どの文化体系にも真実があるように、どの民族にも美点はある、と考えた。⁽⁸⁾

東学党の乱（一八九四年）は農民戦争であったが、その指導者であった崔濟愚（一八二四—一八六四、刑死）の直観的、宗教的体験にもとづく思想は、儒・仏・道三教の兼全を唱えた花郎道の伝統に一致する新しいものであった。⁽⁹⁾

こういう思惟方法が常に現われていたとは言えないであろうが、しかし断続的に出現していたということは、認めざるを得ないであろう。

- (1) 横超慧日「二障義、研究篇」(曉城趙明基博士追慕、仏教史学論文集)、ソウル、東国大学校出版部、一九八八年七月、六四ページ。
- (2) 鎌田茂雄『朝鮮仏教史』(東京大学出版会、一九八七年二月)八九ページ。
- (3) 最近西山大師に関する研究が盛んに行われるようになった。特にまとまった論文集として、曹溪宗、海南大興寺、大韓伝統仏教研究院主催、第7回国際仏教学術会議、『護国聖師 西山の思想』(一九八六年七月)という報告がある。
- (4) 高橋亨『李朝仏教』(国書刊行会、昭和四八年二月、四〇九ページ)。
- (5) 金時習に関しては、すでに高橋亨『朝鮮仏教』(昭和四年)、一八九ページ以下、忽滑谷快天『朝鮮禅教史』(春秋社、昭和五年)、三三九ページ以下に論ぜられているが、最近の研究としては、金知見「雪岑の華嚴と禪の世界」という詳しい論文(道源、柳承国博士華甲論叢)一九八三年一月所収)を参照されたい。

- (6) 高橋亨『李朝仏教』(前掲)、一九五—二一四ページ。
- (7) 金泰俊『虚学から実学へ十八世紀朝鮮知識人洪大容の北京旅行』(東京大学出版会、一九八八年五月)、七二ページ。
- (8) 同上、一五一ページ。
- (9) 李箕永「朝鮮哲学」(ブリタニカ国際大百科事典)一三、一九八八年一月、三八七ページ)。

(一九八八年九月十日脱稿)